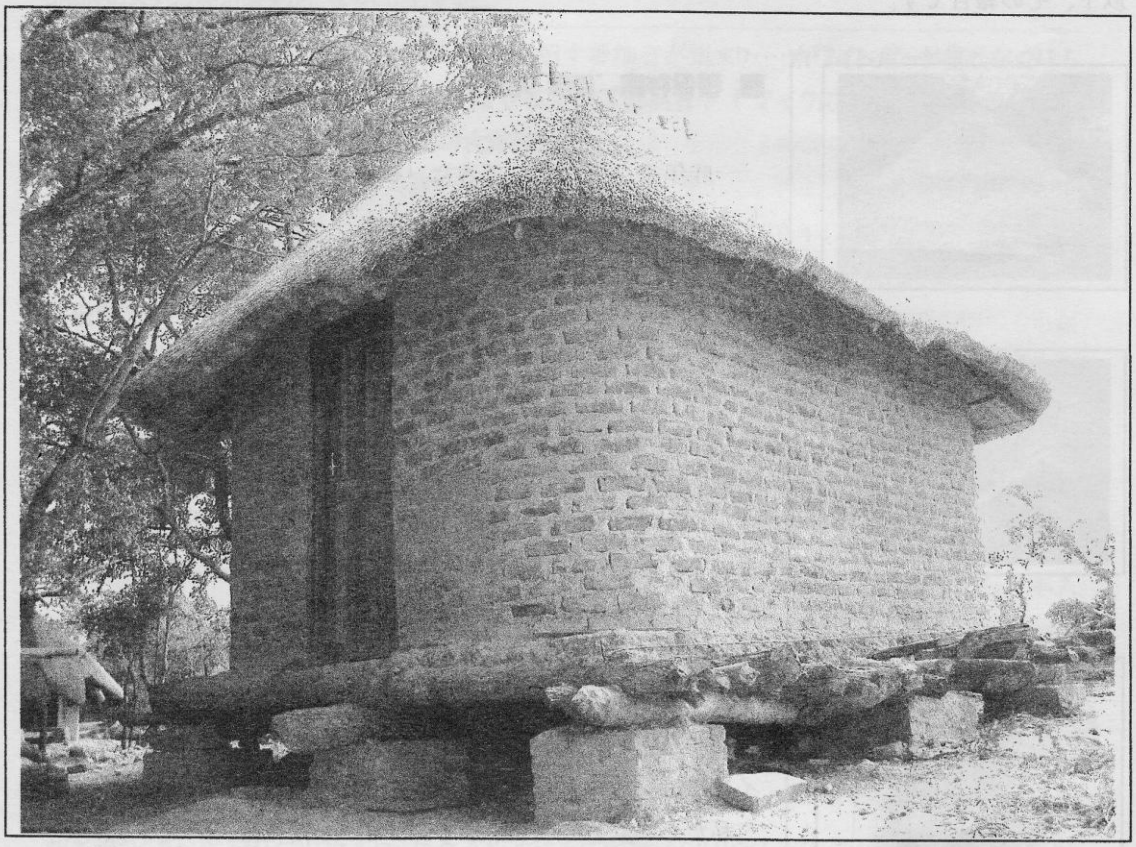
アフリカと日本の開発のための対話プロジェクト
Dialogue and Action for Development Alternatives in Africa and Japan

第5号
2007年8月9日発行

DADA



種保存庫が"ほぼ"完成しました。

←"ほぼ"の理由は、本文2、3頁を。

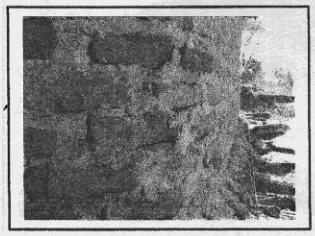
DADAは満5年。活動も6年目に入りました。
これからもどうぞよろしくお願いいたします。

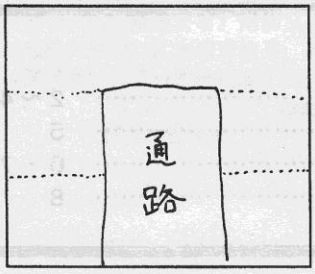
目次

● ジンバブウェ出張報告 …… 2～4
● 最近のジンバブウェの状況 …… 5
● 総会報告・講演会報告 …… 6・7
● お知らせ …… 8

■ ジンバブウェ 報告 ■

この４月下旬～５月中旬で、尾関葉子がジンバブウェに出張をしました。
以下、その報告です。





■ 種保存庫 "ほぼ" 完成！

一昨年来、支援をしてきた「種保存庫」がようやく完成しました（表紙写真参照）。

保存庫は高床式で、茅葺の屋根（写真左上）に焼きレンガの間を泥の粘土で作った粘土で固めた土壁（写真左二番目）と、手作りの木の扉がついているものです。

内部は、５つの部屋にわかれており（左下図参照）、それぞれの部屋にはドアがなく、代わりに目の高さよりも高い位置に小窓（小枠）が一つずつ空いています（写真左三番目）。これらの小窓は、種を入れた後、泥の粘土で閉じてしまいます。（写真右頁上２枚参照）。小窓をつぶしてしまうのは、ねずみの侵入を防ぐためだそうです。

一時は、将来的に建設を考えている大規模な種センターを建てるというアイデアも生まれたのですが、インフレが相変わらず続いていることなどもあり、当初の予定のデザインに近いものとなりました。

私たちが訪れた時は、すでにメイズ、落花生、ソルガム、ミレット、ラポコの５種類の種がそれぞれ、袋に入れて、保管されていました。

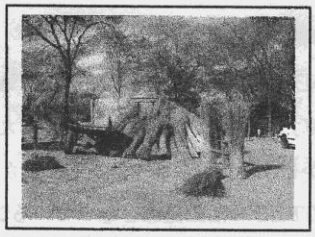
■ 不足分は、AZTRECの持ち出し＋村人の労働奉仕

DADAが支援した額は1,000米ドルで、レンガ焼きとレンガ積みの人件費（職人の技を持っている人に限られる）、屋根の土台になるまっすぐな木、その土台の木と茅を留める針金やドアの鍵などに使われました。

その他の費用は、すべてAZTREC負担、あるいは、村人の労働奉仕です。イギリスの団体が同時期に、加工機材（製粉機など）支援をおこなっており、当初、その費用の一部を種保存庫建設にもあてる予定でしたが、この団体からの

支援総額が少なくなったため、不足分を、AZTRECが負担することになりました。

AZTRECが買い上げるとはいうものの、茅葺を集める作業などは、村の女性や若者が参加しておおがかりに行われました。(写真右下)



■ しかし、問題は雨…

“ほぼ”完成と書いたのは、理由があります。外壁の写真を見るとわかるとおり、壁はそれほど頑丈ではありません。ジンバブウェの雨季の雨は、日本でいうと、ものすごい強い夕立のようなもので、その雨が叩きつけた場合、おそらく一雨季で壁は崩れてしまうと思われます。

外壁はさらにセメントを塗る必要がありますが、前回の出張の時点では、AZTREC側でセメント代を工面できていませんでした。

外壁をセメントで塗ることについて、DADAが一番気にしたのは、通気性ですが、屋根が茅葺であること、床が高床式であることなどから、問題はないと判断しました。

DADAでは、追加支援としてセメント代を出し、外壁を補強したいと考えています。

詳細は、8月中旬から1ヶ月ほど、尾関が再度シャシェを訪問する際に、AZTRECと協議の上、決定する予定です。

■ 収穫が左右する活動の速度

種保存庫は、小規模の支援ですが、完成までに3年の月日がかかりました。それは、村の人の理解なくしては成立しない活動計画において、彼らの状況、考え方を最優先したからです。

この3年間、ジンバウブェは、旱魃や政治的困難に見舞われてきました。「入植してから初めてこの川が干上がっているのを見た」といわれた2005年の旱魃の際には、種の保存なんて悠長なことをいっていられない。保存庫を建てても、中に入れるものがなければ、意味がないし、今の時点で村人が建設に力を貸すとは思えない、というAZTRECの代表コスマス・ゴネセ氏の言葉には重いものがありました。

2006年は、旱魃の翌年に迎えた豊作だっただけに、種はとっておこう、という機運が村人の中に持ち上がり、人々が積極的に参加したといえるでしょう。同時に、茅葺の採集や、レンガ造りは、現金収入のない村人にとって、重要な機会になったと思えます。

今後の支援について

種保存庫建設支援から、種支援へ

DADAでは、ここ数年、「生活を営む力をつける」ための支援の中心を、「種保存庫建設支援」とし、皆様へのご協力を呼びかけてきましたが、今年度から、「種保存庫建設支援」よりも幅の広い支援として、「種支援」をしていくこととしました。引き続き皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

■ 時間のかかる「種保存」の活動

AZTRECとその活動地の人々が、種の重要性に気がつき始めたのは、２００２年の地球サミットでした。サミットに合わせて東南部アフリカのネットワーク団体ペラム・アソシエーションが、農民集会を開き、ジンバブウェの１０地域から３０名が参加した農民集会で、参加者たちは、ブラジルやインドからサミットに集まった農民と出会い、「種」を自家採取すること、その種を守ることがいかに大切かということを意識し始めました。これ以降、AZTRECでも、種の収集やシード・フェアなどの活動に積極的になります。

とはいうものの、具体的に「種」を自分たちで栽培して次の生産にまわすというサイクルが確立するまでには長い時間が必要です。「種」をまず栽培し、栽培期間（＝雨量・雨季の期間）を調べ、それが地元の気候に適しているか判断した上で、農民に配布するには、ある一定の量を確保しなければなりません。AZTRECとDADAが始めたメイズの在来種収集も、今年で５年目になりますが、いまだ一部の農民に試験的に配布しているのみで、活動地全域、あるいは緊急事態に対応できる規模には至っていません。

■ 今後の支援活動

DADAとしては、必要であれば、AZTRECが活動する他地域（ムパタ、ジムト、ネリピリ他）にも「種保存庫」建設の支援を行いたいと考えています。しかしながら、村人にとって、今、最重要なものが種保存庫かどうか、聞き取り、話し合いから始めていく必要があります。

AZTRECの活動拠点となっているシャシェにおいてさえも、旱魃やインフレなどによって保存庫建設が中断・延期を余儀なくされてきました。“鶏と卵”の議論なのかもしれませんが、AZTRECのスタッフ自身も含め、活動に参加している全員が農家であることを考えると、彼らの最優先課題である“収穫”に、活動が左右されると言っても過言ではありません。

■ 「保存庫」特定ではなく、支援に幅を持たせる

支援活動を「種保存庫建設支援」と特定せず、「種支援」とすることで、以前おこなっていたような「種」そのもの購入や、ワークショップなどへの参加支援等、状況によって柔軟に対応できる支援を考えています。これからも、AZTRECと一緒に、地域の状況を見ながら、ゆっくりではあっても、確実な実を結ぶ活動に支援をおこなっていきたいと考えています。

今後とも、ご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

最近のジンバブウェの状況

■ 3月の収穫

ジンバブウェでは、11月から3月、4月までが雨季となりますが、今年(2007年)の雨季は、全国的に雨量が少なく、収穫は激減。政府は早々に食糧配給の緊急アピールを出していました。

シャシェも例外ではなく、作物のできはよくありませんでした。20ミリ程度の雨が1日降ったかと思うとあとは2週間まったく降らず、また少量の雨が1日降っては次の日からまた2週間程度雨が来ないというようなパターン。作物には大打撃でした。

例年、1月には雨の中間乾季（ドライスペル）があるのですが、今年はその期間が長く、それが原因で多くの作物が枯れたようです。

収穫は個別の農家で異なるので一概にはいえませんが、シャシェでも、食糧が来年の収穫まで持たないという予測が出ています。

■ 奇跡のソルガム

シャシェには、政府が灌漑建設を予定している9ヘクタールの土地がありますが、灌漑建設はこのところの経済危機の余波を受けて、中断。だめもとで今年のドライスペルの後にソルガムを蒔いたところ、幸運にも、ドライスペルの後、2月からの雨量が増大。かなりの収穫が見込まれ、不作の年に恵の収穫となりそうです。

■ 止まらない超インフレ

最近のジンバブウェの経済状況は益々厳しくなっています。

5月頃の発表で、インフレ率は4,000%（前年度比）となっており、6月の時点で政府は「価格統制」を指示。ところが一方的な統制命令であるため、生産・流通の分野でボイコットが起き、店からモノが消える事態となり、今も続いています。人々は、モノを見かけたら買いためる、声をかけあって他人の分も購入するというようなこともしていますが、そうした努力も通用しないほどの厳しい状況になっています。

■ 1日20時間の計画停電

インフレに追い討ちをかけるように、5月から計画停電（1日20時間の停電）が実施され、夜間のわずかな時間だけ電気が通じるという状態が日常化しています。

ジンバブウェの場合、都市ガスはなく、プロパンガス等は例外。多くの家庭は“オール電化”です。今回の長時間の計画停電の導入で、煮炊きにも困る深刻な事態になっています。

電気だけでなく、水も不足しており、断水も日常茶飯事になっています。富裕層は、敷地内に井戸とジェネレーターを完備している場合が多く、自家発電・自家取水できますが、そのような設備がない一般の人々は、出勤前に、近くの川や古井戸の水を汲み、森や林、公園に薪を取りに行くという生活を強いられています。

ジンバブウェは、ここ数年、長期政権への批判から援助が止まっており、そのため外貨不足となっています。ガソリン不足も深刻で、都市の生活は益々厳しいものとなっています。

総会報告（2007年6月30日）

去る6月30日、調布市市民活動支援センター内「はばたき」スペースで、正会員総会を開催、2006年度の活動・会計報告、2007年度の活動案・予算案が承認されました。以下は、国内活動「アフリカをとりまく日本の環境を変えること」事業についてのご報告です。

（2006年度活動報告は、今号に同封致しましたので、ぜひご一読ください。また、今年度活動計画と予算と合わせて、近日中にウェブサイトにアップする予定です）

● 日本国内活動「アフリカをとりまく日本の環境を変えること」の柱の見直しを

この活動の柱は、「メディア・ウォッチ」、「勉強会、講演会」、「政策提言」の３本ですが、ここ数年、政策提言は主だった活動をおこなっておらず、今後も当分の間、特定の「政策提言」活動をおこなう予定もないことから、活動の柱の見直しをおこなうことにしました。議論の経過は、追って会報誌上またはウェブサイトでご報告します。

● メディア・ウォッチ

ウェブサイトに掲載している新聞記事のクリップの装丁の見直しをおこないます。
もっとわかりやすい・クリッパーも参加しやすい形を検討中です。

また、一昨年より継続して行っている【座談会】。今年は、読者による座談会を計画中です。詳細は近々にウェブサイト上で発表いたします。好評だった昨年度同様、今年度の座談会も、ぜひご期待下さい。

2月17日の「アフリカ報道ジャーナリスト座談会」講演録ができました！

今年の２月に調布市たづくりで開催した『情報はどこから？　アフリカ報道ジャーナリスト座談会』の講演録ができました。座談会には100名を越す方の入場があり、盛況でしたが、色々な行事が同時におこなわれている時期でもあり、行きたいけど予定が重なっている、行きたいけど（調布は）遠い、などのお言葉をいただきました。

DADAでは、なんらかの形で報告をと考えておりましたが、この度、講演録として発行することに致しました。録音のテープの音質がよかった（たづくりさんありがとうございます！）ことも加えて、色々な問題提起がちりばめられているこの座談会の内容を一人でも多くの皆様と共有したいとｽﾀｯﾌ一同が感じだからに他なりません。

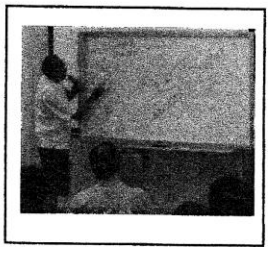
講演録は、講師３名（毎日新聞社　藤原章生さん、朝日新聞社　平田篤央さん、フリージャーナリスト　大津司郎さん）のそれぞれのお話と、後半のディスカッションの全文が掲載されています。A４版、中綴じ製本　４５頁。**送料込みで600円です。**

ご希望の方は、DADA事務局までメール（dada-africa@nifty.com）でお申込下さい。講演録と振込用紙をお送りいたします。

お申込　お待ちしています！！

大津司郎さん講演「アフリカ紛争を読み解く」

正会員総会が行われた日の午後、同会場で、大津司郎さんの講演『アフリカ紛争を読み解く』を開催しました。DADAのスタッフ相川明子がご報告いたします。



当日は70人を超す参加者が集まり・・・**ホワイトボード書きなぐり！ルワンダ映像や写真もご覧あれ！！マイクにスイッチ入れるのも忘れるほどの大津節炸裂！！！** そんな3時間以上に及ぶ盛りだくさんの“大津ワールド”に全員引き込まれていきました・・・。

なぜ自分(＝大津さん)が90年代の、10年以上の前のアフリカの紛争の話を今日本でするのか。そんな問いかけから始まりました。

日本では「もう10年も前の話」かもしれない。でも、その「10年も前の」紛争が別の国の今も起こっている紛争に繋がっている。現代史の一部なんだ・・・そして、アフリカの紛争には、人間の危機・問題・困難が集約されている。だからこそ、伝える必要がある・・・

,そして、**私たちが普段聞きなれない独特の用語**のオンパレードがはじまります。**・・・ミリシア、ゲリラ、インサージェンシー、カウンターインサージェンシー、コンプレックス・エマージェンシー・・・**英語を話す人には多少イメージできても、定義はいまいち良く分からない、そんな言葉ばかり。でもこれらの単語は皆、世界で紛争を語られるのに当たり前に使われる用語の数々。それを私たち日本人は知らない・・・

単に「ゲリラ」と呼ばれる人たち。でも彼らは小規模でありながら、その特性を活かし移動性に富んでいて、何より地勢を知り尽くしており、持っているネットワークや情報を駆使してそれをインテリジェンスに高め、自分たちのセキュリティーを確保し、日々戦い、生き延びている。

誰が何故闘っているのか、それが分からずに、紛争や平和を語れない。そして世界で紛争や平和を語るときに使われる用語すら、日本人はまだまだ理解していない。でもそこが分からなければ、現場で普通に話されている用語とその用語によって表される事象の背景を理解することが出来なければ、いま紛争の現場で起こっている情報を集め、分析し、知恵に高め、平和のために何ができるのかと考えることさえ出来ないのではないか・・・

そういう**カタカナ専門用語**を見てはソッコウ記事を読み飛ばし、耳に入ればチャンネルをかえてきた私は、バットで後頭部をガンガン殴られるような感じがしました・・・

最後になりましたが、長い時間お付き合いくださった参加者の皆様、大津さん、会場設営や片付けをお手伝いいただいた皆様、当日会場として利用させて頂いたあくろすスタッフの皆様、資料印刷にご協力いただいた西部公民館スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

当日は、参加者の皆さんから大津さんへの質問を書き込んでいただくように、「質問票」を配り、大津さんに答えていただく形にしようと思っていたのですが、大津さんが喋りたらないご様子だったので、会場の皆さんに了承を頂き、質疑応答なしで最後まで「走り抜けて」頂くことにしました。質問票を記入していただいた皆様、すみません。できる限り当団体のウェブサイト上で大津さんの回答と一緒にご紹介したいと思っておりますので、もう少しお時間をいただければ嬉しいです。

【本】吉國恒雄さんの著書2冊 ご紹介

前号（4号）でお伝えしましたが、ジンバブウェ歴史研究家の吉國恒雄さんが亡くなられてから1年が経ちました。

先日、吉國さんの著書が2冊続けて発行されましたので、ご紹介いたします。

『イギリス帝国と20世紀 第5巻 現代世界とイギリス帝国』（木畑洋一 編著 ミネルヴァ書房）

第7章 燃えるジンバブウェ -反英農地改革と「第二の民主化」をアフリカ現代史の文脈で考える-

本書は、イギリス帝国と20世紀というシリーズのタイトルにあるように、イギリス帝国歴史研究の専門書ですが、第5巻の第Ⅱ部の「帝国内諸地域」に、吉國恒雄さんの論文「燃えるジンバブウェ」が収められています。

ジンバブウェの報道は、殆どが、ムガベ政府を非難しているだけの内容が多いのですが、吉國さんは、そうした見方に対して、「ムガベ政府の「反民主的、人権無視」の政治の問題、同政府の「強権政治」の問題で（略）だが、はたしてそれでよいのだろうか。（略）そこで生活する者の「感覚」として、こうした疑問をだかざるを得なかった」（本書より抜粋）と述べて、「複雑で、錯綜し、こじれきっている」ジンバブウェ問題を理解するための道筋をつけようとしています。

短絡的「人権」「民主主義」を振りかざす一連の報道と異なり、緻密で冷静な分析は、まさに、長くこの国に暮らした吉國さんでなければ書けなかった文章であり、ジンバブウェ、そしてイギリスが抱えるこの問題の深さ、複雑さを鮮やかに（でも静かに）映し出しています。

読みながら、著者を失ったことの大きさを改めて感じました。ジンバブウェを深いところで理解するために、落ち着いて深い洞察をもった言葉をつむぐ人が何より必要だったのに、残念でなりません。少し値段が高いですが、ジンバブウェはもちろん、アフリカに関心を持つ人、国際関係に携わる全ての人に、今、一番、読んでもらいたい旬の一冊です。

（ＩＳＢＮ 978-4-623-04923-3 定価3,800円＋税）

もう一冊、『African Urban Experiences in Colonial Zimbabwe』がジンバブウェの出版社 WEAVER Press から出版されています。次号で、ご紹介させていただく予定です。

//編集後記//

- 仕事場が変わり、忙しい日々を送っている。都会ビルの窓から、この空はじんばぶぇにつながっていると思いながら、仕事をしているが、アフリカに行きてぇとつぶやく日々である。(pon)
- 7月、3年ぶりぐらいに熱を出した。が、1日で下がった。が、せきが残り、夜も寝つけない。健康第一と改めて思った梅雨時。変な気候は体調にも影響がある気がするなあ（佐）
- 久々に沖縄本島に台風が直撃。荒れ狂う木々を見ながら、種保存庫の土の壁も気になりました。（廣）
- ジンバブウェの記事が久しぶりにA新聞に載っていた。当然、現政権を批判。そりゃ、批判されるべき現状ではあるんだけど、でも、でも、何かが足りないんだよなぁ。じゃぁ、自分はちゃんと伝えられているんだろうか。自分のふがいなさを思いながら、吉國さんの論文を読み、あらためて、この先生を失ったことの大きさを思い知らされています。合掌（お）

会報 DADA 第5号 2007年8月9日発行
《発行人・編集責任者》尾関葉子
《編集スタッフ》本田真智子、廣内かおり、佐藤由規、相川明子、尾関葉子
《発行所》アフリカと日本の開発のための対話プロジェクト
(Dialogue and Action for Development Alternatives in Africa and Japan)
郵便物送付先：（東京）〒182-0022 調布市国領2-5-15 調布市市民プラザ あくろす 市民活動支援センター内 ボックス No.7
（沖縄）〒900-0013 那覇市牧志3-2-10 ぶんかテンブス館3階 那覇市NPO活動支援センター気付
FAX：042-444-6934 E-mail：dada-africa@nifty.com URL：http://homepage3.nifty.com/DADA/
※この会報は古紙100%のリサイクル紙を使用しています。